

井上圓了による「長岡洋學校和同會」の設立とその後の動向

土田隆夫

tsuchida takuo

はじめに

井上圓了は、明治七年（一八七四）五月五日に「新潟學校第一分校」に入門・入塾（入学）した。北越戊辰戦争の戦燼が未だ消えやらぬ明治五年（一八七二）十一月二十三日に長岡洋學校が開校してから間もない、校名が変換した一年余り後であった。門生として入門した圓了が「句讀師雇」となり、「和同會」を設立した明治九年（一八七六）末にはさらに校名が長岡學校に変わった。その後、明治二十六年（一八九三）には古志郡立長岡尋常中學校に発展した。

明治三十年（一八九七）、当時、古志郡立長岡尋常中學校の教員であった本富安四郎は、長岡城の本丸跡に建つ河井継之助・山本帯刀の碑を仰ぎ見て、その感懷を次のような詩に託して詠じた。

「長岡城址感懷

本富安四郎

彼処に立てる彼の石碑 何を記すか読み来れば

維新歴史の真先きに 血をもて其の名を留めたる

我が先輩の事蹟をば 不朽にのこす文字なり

げにや浮世の定めなき 昨日の淵も今日の瀬と

変はる流れは徳川の 大樹のみきも年ふりて

一夜の中にはかなくも 薩摩の嵐にたふれけり

(中略)

夫れ成敗は時の運 石橋山の頼朝や

ワ―テルローのナポレオン 況してや孤城援けなく

天下相手の此の戦さ 敗るるとても誉れなり

(下略) (傍註筆者)

北越戊辰戦争に際して長岡藩の先頭に立って新政府軍と戦い敗れた両雄の石碑の碑文に寄せての、長岡藩士の家に生まれた本富安四郎の悲憤が伝わってくる。この年十月、学校は城址の三の丸跡から現校地の四郎丸「諏訪堂脇」に移転し新たな学校の歴史が始まり、現在の新潟県立長岡高等学校へと発展した。

一、井上圓了在学期における「長岡洋学校」の学業様相

井上圓了が入門入塾(入学)した明治七年から在学していた明治七年・八年・九年(一八七四―七六)の「長岡洋学校」Ⅱ新潟学校第一分校・長岡学校の学業について瞥見しておこう。

何れも「長岡 第一分校 校監局」と表紙に記されている学校の「日誌」の記事によって、当時、教科書として使用されていた書籍類についての記載などから圓了在学期の学業を推量することにした。

かなりの記載がみえる洋書類の教科書は当時においては貴重書であって地方の学校では入手困難であった。したがって長岡洋学校の創立者三島億二郎が、開校当初から初期の洋学校・新潟学校第一分校・長岡学校において

は慶應義塾の福澤諭吉を通じて東京から購入してきたものが多かった。そして学校が次第に軌道に乗ってきた明治七年ごろからは、新潟學校の本校から借用したり、長岡縁^{ゆかり}りの先学・先人から受贈したものなどがあつた。門生たちはほとんどが学校から貸与されたものを使用していた。

「明治七年甲戌 十月十一月十二月 日誌 長岡第一分校 校監局」（以下「日誌」と略記）の十月十一日の記事には次のような記載がある。

「十月十一日

（野村）
兵太郎
（學校世話掛・幹事）
（記載者）

一 本校より借用之典籍午前八時前左之

通り達之

一 英國史
グランドリッヂ
ウエルン

拾部

一 第一リードル

拾五部

一 第二リードル

拾五部

これらの書籍は圓了が入学当初に学んだとする洋書のリストには見られない。後年の回想記録では、入学後、一年程は、「東京から或る西洋人が漫遊に來たのを先生に頼んで二、三ヶ月「リードル」を學んだ。」とあるから一般の門生よりも既に英学の基礎学力が高かつた圓了は、右の書籍のうちにも圓了が學んだ洋籍が含まれていたと思われる。

なお、同年十月十九日の「日誌」には

「グランドリッヂ 英國史初筆 買上伺一通」

とあり、十月二十五日の記載にも

「佛國史初筆買上ヶ伺一通」
スタンプ

とある。

したがって、「初筆」(初版本カ)とあるような貴重な洋籍類は「第一分校」(長岡洋學校)で購入したのであろう。

翌明治八年五月十七日の項には次の記載がある。

「二書肆 佐藤作平在東京中ニ付、左

之典籍買入周旋之義、以書面郵便

ニ而差出之。

但、去ル十四日差出し候処、記

載落候に付爰ニ記ス

一 ペンノック 希臘史 六冊

一 同上 羅馬史 六冊

一 テーロル 萬國史 九部

但近世古代共

學校が軌道に乗ってくるにしたがつて教科用として使用する書籍類の整備のため一致して努力していたことがうかがえる。

學校取締であつた長岡洋學校の創立者三島億二郎も先頭に立つて努力していた。

同年五月二十四日の記事には次のようにある。

「五月廿四日

一三島取締 今夕本縣より帰岡、本

校より左之典籍借受ケ持歸之。

一 テーロル 萬國古代史 五部 「

井上圓了は明治十年（一八七七）六月、長岡学校句讀師^{くとうしやとい}雇・授業請持^{うけもち}を辞去して、京都の東本願寺の教師教校英学部に入り、さらに翌明治十一年九月には大学豫備門に二〇歳で入学した。このころの様子について圓了は次のように回顧している。

「此の學校の出来たのは、全國に英語學校があつた、新潟には新潟の英語學校、東京には東京の英語學校があつたが、之を止めて、豫備門として立てたのである。其れ故、西洋人ばかりで、何でも西洋風にやる、日本から、はるばる西洋に行くのは、中々の事である。又強いてさうしなくても、日本に洋學校を建てて、全く西洋風にやれば、其れで洋行したと同じであると云ふのであつた。（中略）然し答案は英語で書くのであるが、文章は書いた事がないので、是又大に困つたが、幸にも登第が出来た。其時の點の取り方は、全課目を平均して、六十點に達すると上られるのであつた。其結果はと云ふと、丁度彼の地に知つた人があつたので、其の人から寫してもらつて見たら、私ながらあきれた。如何かと云ふと、文典が十九、作文が二十五、それで如何して登第が出来たかと云ふと、數學が幸に満點であつたから、登第が出来たのだ。（下略）」

（『和同會雜誌』第拾八號「明治29」11発行）
（『所収』博士井上圓了氏の講演による）

圓了が入門後一年三か月程経つた明治八年九月一日の「日誌」には「算術」の教科用図書が備わつたことが記してある。それには、

「算術譯書

第十七卷より
第十七卷迄

四部

一右同断

第十五卷より
第十八卷迄

式冊」

とあることからこれらの算術書を教科書として圓了は「算術稽古」（洋算の法）に励みその効果が「數學が幸に満點」ということで結実したものと推定される。

なお、この日には「算術譯書」のほかにも、「スペルリング初筆記 壺通」・「スペルリング 拾五部」などの図書が到着したことが記されている。「スペルリング」とは「リードル」（リーダー）のことであつたと思われる。

井上圓了は「奥村句讀師」（奥村金太郎・後に助教）が担当する「算術稽古」にも熱心に努力していたらしい。同年十二月七日付「日誌」の記事には、

「二本日より當分之内算術課業午後二時より

三時迄一時間増候事

小山吉郎 梅野四男吉

酒井久三郎 井上圓了

」

と記されている。ここに記名されている四人は「算術課業」を一時間増加するほどに「算術稽古」に励んでいたことが知られる。

井上圓了以外の三人は工学・農学など、何れも後年には理系の分野で活躍するようになった人びとであることを想起すると、圓了の学際的な学習傾向がこの時期からあつたことをうかがわせる。

同じく明治八年五月十四日の「日誌」には、次のような記載がある。

「小林病翁より左之典籍當校貯積

被相贈候事

一 德國學校論畧 壹部 上下式冊

但彦弥目黒十郎方江相越候節、

横田大三同所ニ而落合候處、右

仁より被届ケ被呉候旨ニテ持歸之」

これによれば、病翁小林厩三郎から同日、前年の明治七年十月に上梓された『德國學校論畧 一名西國學校』上下二冊Ⅱ一部が著者の小林厩三郎から弟横田大造（小林又兵衛の四男幼名定四郎・横田家の養子となり別家）を通じて学校に贈られたことが知られる。

小林厩三郎は北越戊辰戦争の直後、長岡藩の復興と発展をはかるためにはまず教育の推進をすることだ、として明治三年六月十五日に長岡藩國漢學校を開校した洋学の先駆者である。

明治二年十一月には三島億二郎とともに再興長岡藩の大参事となった。のちに東京に出て隠棲し、明治六年四月には『小學國史』十二巻を上梓している。国文で書かれた児童向きの大部な国史著述である。

翌年上梓の『鰻刊 德國學校論畧』は、ドイツの「花之安」と呼ぶ宣教師がプロシアⅡドイツの学校制度や教育事情について著わした漢文記述の書を「小林病翁」が鰻刻し訓点を付して読み易いように刊行した書籍である。この書の「序」において病翁は、一八七一年のプロシアによるドイツ統一は國民教育の成果を基盤としている」と論述している。近代的な教育についての病翁の考え方のベースを知り得る。

なお、病翁の弟横田大造は当時、古志郡赤川久七新田（現長岡市）に居住しており、後に卒の横田鐵二郎は明

治十三年四月、長岡學校に入学している。先述のように『德國學校論畧』はこのとき大造を介して學校に贈り、洋学教育の推進に役立たせようとした病翁の意図がうかがえるようで興趣をそそのめるものがある。

そしてこの書もまた、当時の井上圓了には適宜な学識を備えた門生として程良く適合した翻刊書で折々味読していたのではなからうか。

教育者として建学に努めた後年の圓了の素地はこの時期から徐々に形づくられて行ったことを考えることができよう。

「長岡洋學校」 Ⅱ長岡學校での課業は、門生（入門生・入塾生）の学力や学習歴などの程度に応じて各科目によつて組分けをされていた。

その組分けは第1・第2・第3・第4の組課業と等外課業などであつた。

明治六年六月に定められた「教授並教場之規則」に拠つて教授内容は決められていた。これは同年に慶應義塾の塾長格から三島億二郎により招請されて来任した藤野善藏が作成したものであつた。例を挙げると、次のようである。

「第一の組課業

一、英國史 毎日一時一週五回

藤野善藏受持

一、大合衆國史 同上

全

一、算術 毎日二時

土曜日一時一週六回

新井二郎受持」

このような課業形態は三田の教場で行われた慶應義塾の規則を規範として立てられたものであった。課業内容についてもその「規則」には次のようなことが明示している。

「一、毎日生徒をして前日教授を受

けたる場所を暗誦せしめ又時

々其文意を講演せしむ 教師

は其問に答へたる数を記し置

き月末に至りて之を総計し点

数の多寡に従ひ其席順を定む

べし

一、毎年一兩度の大試業を為

し其節甲乙と毎月の点数と

を参考し以て生徒の等級を

進退す 或は時の宜に因り

例外の処置を施すことある

べし 但し大試業の期と其

方法とは追て布告すべし

一、土曜日は半日の業を休み

更に一科或は二科の講義を

設く

『長岡高等学校百年史』

所収の拙稿参照。

これに拠ってみると、例えば土曜日の課業は半日であったことから、後述するように明治九年十月二十日に圓了が設立した「演説会」としての「和同會」は翌二十一日の土曜日から毎土曜日に「塾生」有志の結社人員によつて開催されるようになったことが肯けるのである。

ここで、右に例示した「教授並教場之規則」によつて展開した長岡洋學校Ⅱ新潟學校第一分校における圓了在学期の課業形態の一端を學校「日誌」から抄出しておこう。

◇「(明治七年)十月廿二日

一 稲垣詮平請持第四之組 理學初歩

今日卒業ニ付 明廿三日よりペアレー

萬國史授業候事

句讀師の稲垣詮平（明治五年に長岡洋學校に入門し明治七年句讀師に任用）が請持つ「第四之組」課業のうち
の「理學初歩」が修業（修了）となり、『ペアレーの萬國史』に進んだことを記している。圓了自筆の「履歷書」
には明治七年五月五日に入門した当初に学んだ「洋籍」の筆頭に同書を挙げている。

◇「(明治七年)十月廿五日
（ママ）（実際は廿七日の記事となる）

一 仙田樂三郎請持 パアレー萬國史

第三之組卒業 クワケンボス窮理書

ニ相成リ 明廿八日より小島助教請持

ニ相成リ 是迄同人請持同組クワケン

ボス小米國史 仙田樂三郎請持授業候

事

これによれば、十月二十八日から課業請持の変更があつた。仙田樂三郎句讀師が請持っていた「パアレーの萬國史」の課業が第三之組については卒業（學習修了）となつた。したがつて第三之組の課業は「クワケンボスの窮理書」を学ぶこととして小島銑三郎助教が請持になつた。

そしてそれ迄小島助教が請持っていた同組の「クワケンボス小米國史」を仙田句讀師が請持つて授業をするこゝとなつた。

この課業請持の変更の背景には仙田樂三郎句讀師が同年十月二十日付けで「五等句讀師試補」から「新潟學校四等句讀師試補」に昇任したことがあつた。それを承けての変更であつたと思われる。なお、このとき仙田句讀師の月給は金五円であつたのに対して小島助教の月給は金三十拾円であつた。因に想起すると、明治六年に英學教師藤野善藏が月給百貳拾兩（円）で慶應義塾から招致されて来任したことに比定すれば余りにも大きな差違であつたことは否めない感がある。

仙田樂三郎は旧長岡藩士で、明治六年に長岡洋學校に入門して學んでいる。圓了と同時期に句讀師として教え、明治三十一年（一八九八）九月十八日に、漸く「尋常中學校」として學校の基礎が安定したばかりで、五

年制となった「古志郡立長岡尋常中學校」に校長として着任した。着任に際しては同日午後四時、生徒一同が長生橋まで出迎えた、という、明治三十一年（一八九八）六月十四日迄、四年九か月にわたって「長岡中學校長」を務め学校発展期の基盤を確立した逸材であった。校長としての仙田樂三郎は生徒たちの期待感を違えることなく、意気込みを持って率先、躬行実践する教育を展開した。それによって学校に新たな校風を生み出し整然とした学校生活が営まれたという（『寄宿舎日誌』私立長岡尋常中學校）（『鰯刻』監修・校注 土田隆夫）（新潟県立長岡高等学校同窓会刊・二〇〇四）所収拙稿、『私立長岡學校・長岡尋常中學校の「寄宿舎日誌」に見る教育』参照）。

二、井上圓了による「和同會」の設立

「武ニ於テ勢力アルモノ 文ニ於テ又成功ヲ見ルナリ」として（明治三十九年十二月、「學海に於ける長岡の地位」）本富安四郎が目指した学校の活動基盤は「和同會」であった。長岡洋學校の創立間もない明治九年（一八七六）十月以来、連綿として続いて今日に至っている和同會の設立について先ず管見を記そう。

明治五年（一八七二）十一月二十三日、長岡洋學校が創立された。その後、新潟學校第一分校、「仮學校」と変遷した學校で、「句讀師^{こうしやとい}雇」として「授業^{うけもち}請持」をしていた井上圓了（明治七年五月五日長岡洋學校Ⅱ新潟學校第一分校Ⅱに入門・入塾）は、明治九年十月二十日、このたび「和同會」を設立したい、と學校に申し出た。明十月二十一日の土曜日から毎土曜日に開催したいという企図で「規則書」を提出し、學校から許可された。その結社人員は井上圓了をはじめ梶野四男吉 丹路冲徳 長尾平藏ら八人であった。

翌十月二十一日午後一時から學校の二番講堂において開筵（開會・開講）された。規則のとおり作文等からはじめて午後四時前には終了した。この日、漢學担当の、翌月支那學助教となった句讀師田中春回が傍聴し、學校

事務掛の野秋兵太郎も同席した。また、設立時の八人の結社人員に加えて秋山四郎太 榎 武 北原静策ら九人が入社人員となり、総勢十七人の有志によって発足した。

当時の慶應義塾で既に明治七年（一八七四）六月に発会していた三田演説會に倣ったこの会の目的は、「塾生相互の懇親を厚くし、演説や討論の稽古をしようとするもの」であった。「塾生」とはもともととは、慶應義塾に学ぶ人びとを指す名称から名付けられたものではあったが、この場合、学校の通学生のほかには当時学校に併設されていた寄宿舎の入舎生を示すものであった。

慶應義塾の創始者福澤諭吉は、その著作『學問ノススメ』十二編に『演説とは英語にて「スピーチ」と云ひ、大勢の人を会して説を述べ、席上にて我思ふ所を人に伝るの法なり。』と記している。これによって思惟すれば、福澤諭吉が初期の慶應義塾で発会した三田演説會の理念が井上圓了によるこの「和同會の設立」についてその機縁となったことは十分に考えられる。井上圓了が「和同會を設立した」前年の明治八年五月には三田演説會の演説会場を三田の高台に建築し、たいそうな聴衆を集めて演説をした、という。しかも翌月の六月からは各月の第



長岡學校時代の井上圓了

一土曜日から第四土曜日の「毎土曜日」に実施するように体裁が取り決められている。井上圓了は「和同會」の開催曜日まで三田演説會に倣ったと思われる。ただ、初期の三田演説會には「和同會」のような「塾生相互の懇親を厚くし」の「懇親」の語は見当たらない。純然たる「學術」の場であったようであり、この点において「和同會」発足時には既に独自の特色があったことを感じ取ることができよう。

井上圓了は大正五年（一九一六）に、新潟県立長岡中學校の卒業生と

関係者等が記述した「在學當時の母校」と題する回想録の綴りに、和同會の設立について自筆で次のように記載している。

「和同會ハ拙者ガ故梅野四男吉ニ相談シテ創設セルモノニシテ 名称ハ論語ニヨリ和シテ且ツ同スルノ意ヲ取りテ拙者ガ命名シタルモノナリ 明治九年ノ創立ト記憶ス」

このように、和同會の名称は、「論語」の子路第十三「子曰、君子和而不同、小人同而不和」と、同じく「論語」の学而第一「知和而和、不以礼節之、亦不可行也」の「意」を採用して「和同會」と井上圓了自身が命名した、と明確且つ明晰に記している。すなわち、「近代的な自我意識」が未だ未成熟であった明治九年当時においては、「同セス」ではなく、「同スル」としたのである。何よりも圓了は長岡洋學校の先輩であり、且つ「同志」でもあった梅野四男吉に「相談シテ創設セルモノニシテ」ということは決して圓了が独断でしたことではなかった、ということの意味するものである。族籍が士族ではなく、「洋學生徒」でもなくて「国漢文ノ課程」に「入門入塾」し、その後、「句讀師雇」として一八歳で授業の補助を担当した圓了には自分なりに懊悩していたことがあった、とも考えられる。そのようななかで圓了は「塾生」たちの「協同」とか「協調」を強く意識し、「相互の懇親を厚くし」として「和同會」を創設したのであった。そこにはまた、塾生圓了の「近代的自由」への憧憬も潜んでいた、と考えられる。

「和同會」は、明治七年に発会した三田演説會の二年後の設立ではあったが、前述のとおり、その目的に「懇親」を掲げ、「自由」の雰囲気の中でお互いの切磋琢磨による向上を目指した点において圓了の先見性を感じ取ることができよう。

昭和十五年（一九四〇）発行の『和同會雜誌』第92号に、当時の新潟県立長岡中學校教諭 猪俣金五郎は、

「和同の精神」と題した論稿を寄せ、「和同會の名称」について次のように論じている。

「則ち和同と言ふ名称は、論語の和不同から取つたものゝ、論理の形式に泥む事なく其の精神を生かさんとしたものであるから……（中略）……同は和に吸収せられ同化せられて、同の本義に於て和と熟合してゐる自然さを感じる……（下略）」

さらに、お互いに切磋琢磨することについて言及し、論じている。

「斯くて同友互ひに切磋琢磨する事によつて、向上の道を共に進もうとする、協同的な生々發展の精神を標榜したものと解せられるのである。」

まさに、圓了が目指した「演説や討論の稽古をしようとするもの」とする「和同會」は、猪俣金五郎も言うように、「其の精神が向上發展にある事は、誰にも考へられる所であらう。」とする点において筆者も共感するものがある。

三、和同會の刷新と發展——井上圓了設立の「和同會」から生徒会としての「和同會」への發展——

井上圓了が「和同會」を設立してから間もない明治九年秋、十一月には新たな学校への変革のうごきがあらわれた。それまで「仮學校」の名称で存続してきた学校は漸く長岡町からの資本金五五〇〇円を基金として長岡周辺の二十七小区から毎年各区金三〇円ずつを出金して学校を維持してゆくこととなった。

十二月一日、校名を「長岡學校」と改称して改めて県令永山盛輝の臨場のもとで開校式を挙行了た。

翌々明治十一年（一八七八）五月四日には慶應義塾から英学教師藤野善藏が再度来任した。しかしその年秋になって藤野は辞任した。藤野の後任として同じく慶應義塾から旧長岡藩士の出身で、後に「單税論者」として知

られた城 泉太郎が来任した。

城 泉太郎は安政三年（一八五六）長岡藩士河井資信の長子として長岡城下に生まれた。長岡藩疊崇徳館で学んだ後に上京し慶應義塾に学んだ。明治七年には慶應義塾で教えたが、その後土佐の立志社でも教壇に立った。

明治十一年九月、長岡學校に來任すると英学を担当したが、政治学や経済学の分野も得意とした。その弁舌は爽快明晰で、「ミルの代議政体論」や「ギゾーの文明史」などを流暢に講義した、という。

長岡學校は城 泉太郎を迎えて三島億二郎取締りのもので、英学、数学、漢学の三教科を教える、いわば変則的な中学校としてその基盤を固めることが図られた。

いっぽう井上圓了が設立した「和同會」は、圓了が明治十年に長岡學校を去ってから間もなく衰微の様相を呈してきた。「和同會」で演説する者もなくなり、やむを得ず文章を作つてそれを朗読するような状況となつてしまつた。暫くは開会することもなく殆ど廃絶の姿となつていた。それが明治十三年（一八八〇）末頃になつて漸く「再興の議」が起こつてきた。有志の「塾生」・「門生」たちを糾合して廣井 一（明治十二年入学・後、北越新報社社長）・川上淳一郎（明治十三年別科入学・後、新潟県會議員・衆議院議員）等の人びとが、努力して漸く開会に漕着けたようである。

再び開会した後は、毎回三、四人ずつの演説者があつた。また、その都度一人から二人の教員にも要請してその講演を聴いたようである。就中、先述のとおり城 泉太郎は当時、長岡でも希有の雄弁家で和同會の講演でも一際光彩を放つたという。学校でも城は明治十五年（一八八二）に教頭に就任し一時は校長としての事務も取扱つた。城の講演では「露國虚無黨演説・佛國革命論・米國獨立論」などが「雄弁滔々流るゝ如く」で、門生たちに「無量の感懷を与へ自主自由の政想を注入したるが如し」という状況であつた（『和同會雜誌』第46号所収、

明治四十二年十二月十九日、廣井 一述「和同会紀念会に就て」に拠る）。門生の出席者たちによっても討論会が行われて頻りに「憲法私議草案」などについて討論などがなされたという。この頃の出席者もやはり塾生（寄宿舎生）たちが多かった。廣井 一、川上淳一郎をはじめとして、坂牧辰三郎（明治十四年入学・後、善辰と改名し、明治三十四年九月十七日に新潟県立長岡中學校の教諭から校長に就任して四年余り務めた）、大島伊輔等がいた。ほかに塾生以外で本富安四郎（後述・明治十三年入学・和同會の改革者）や橋本圭三郎（明治九年入学・後、日本石油社長）等もいた。教員では城 泉太郎のほか田中春回、丹路冲徳、酒井久三郎、長尾平藏等が尽瘁した。

こうして、井上圓了が設立した「和同會」は明治十三年末頃から明治二十年（一八八七）頃にかけて「中興の時代」となった。

この時期の「和同會」が、学校以外にも市民などと呼ばけて「三田の演説会」に類似したような活動をさんにおこなったのは城 泉太郎による刺戟があったことと思われる。

城は明治十六年（一八八三）四月、長岡學校を辞去した後、「大同団結運動」に参画した。また、明治二十四年（一八九一）には城の編述による『全廢稅 濟世危言 全』（東京知新館藏版）を刊行するなど独自の思想を披瀝した著述に励んだ。同書で城は地租以外の賦税を全廢して土地所有を達成する方途を説いた。

その後、明治十九年（一八八六）に至って「長岡學校」は新しい中学校令の規定などもあつて廢絶の危機に瀕した。

同年五月に田中春回が校長の任に当たり、十二月には「町村協立」により漸く「私立長岡學校」として維持してゆくこととなった。「私立長岡學校」と称した学校では明治二十年（一八八七）になると、生徒の「和同演説

會」に教職員も臨場するようになった。翌二十一年十二月十九日には「和同忘年演說會」も開催されている。

明治二十二年（一八八九）十二月十日、はじめて書写による「和同會雜誌 第一号」が発行され、明治二十八年（一八九五）一月二十三日に、印刷による『和同會雜誌 第一号』が刊行された。

この間において学校も変革を続けた。将来への発展を期して明治二十二年七月二十六日には学校維持組合委員会の推薦によって加藤一作が学校の「総理」（校長職に相当）に就任した。加藤一作は明治維新後間もなく長岡町の戸長となり、洋学校の營繕や管理に当たった旧長岡藩士であった。加藤のもとで当時、二等助教諭であった田中春回は教頭格となって共に学校の経営に当たり、特に学校資本金の募集に力を傾注した。

なお、この頃には嘗て、旧長岡藩領一万石であった栃尾郷の名望家川上喜右衛門、富川岩太、保科義徳等が加藤一作、田中春回にさかんに協力している。それは、明治三年に富川鶴一、山田到處が創設した栃尾郷の初等教育機関「とちお橡尾校」への田中春回の協力に依拠しているところもあったと考えられる。富川鶴一かくいっのあとを承けて「とちお橡尾校」の二代目校長を務め栃尾郷の教育に尽瘁した山田到處（号錫、政尚）と田中春回との強い絆に由来しているところがあった、と筆者は考えている。

田中春回は明治二十三年（一八九〇）十一月、「書写和同會雜誌 第三号」の巻頭言として熱情あふれた雄渾な筆致の達文を寄せた。その要点を抄出しておこう。

「さきつとしより我長岡學校の学の友とし、和同會といふを設けて雑誌という文をあみいでられしハかたみに（みか）學術文章を研ぎて知識を進めんとにそありける。

是をしも無用の事とや誰かいふらん。ただ望むらくはいよく學術文章の道を研ぎ、

知識をたくはへて後の日にこれを実地にほとこして実益を世にあらはされんことをこそかへす（望）くものそ

ましかれ。此頃その第三集をものせられんとて、例に依り予にも片端一言そへよとありけれハいなみかたく
て、無用剰言もて其責を塞くことしかり。

明治二十三年十一月

無用閑人

(田中春回)

しるす

―(傍註筆者)

これを要約すれば、まず、人びとは物事の本質をしつかりと見極めることこそ肝要である。そして個人の尊重と学ぶ者の自由について確固とした考え方を持つことが必要である、としている。そのためにはさらに學術を深めそれを表現するのに文章を習練することが必要で、それに向かってこの「和同會雜誌」を発行して行くことは大きな意義を有している、と論陣を張っている。

現今においても和同会の会員として傾聴するべき論旨であろう。

そして、その思想的根底には、かつて幕末に藩閥崇徳館で学び、のちに助教をも務めた田中春回の古義学者として、また洋学にも通じていた深い学殖と、実学主義の教育思想が貯聚しており、おのずとこの文章に端的に滲泄していることを感じ取る。

明治二十五年(一八九二)十月、古志郡の全町村一五一か町村による組合ができ、ここに「私立長岡學校は解消して古志郡町村立長岡尋常中學校に発展した。翌二十六年(一八九三)八月二十六日、古志郡立長岡尋常中學校と校名を改称して五年制となった。長岡洋學校の創立以来、二〇年にして漸く學校の基礎が安定した。それまでは既述のように校長相当職は「総理」の呼称であったが、以後は「校長」の職名が用いられるようになった。

田中春回は同年十一月に、同校の倫理國語漢文科の授業囑託となった。

これが現在の新潟県立長岡高等学校に発展し、直接的につながっている。



本富安四郎

明治二十七年の『寄宿舎日誌』を繙くと、十月六日の項に、「午後六時半頃^{ヨリ}寄宿生一同食堂^ニ於^テ演說會^ヲ開^キ度^ニ赴^ス願出スル^ニ依^テ、事實取調タル^ニ別^ニ不都合ナキ様子ナレハ之^ヲ許可ス」と舎監山寺容磨は記している。和同會設立当初の「塾生」たちの「演說會」が連綿として継続していたことを思わせる。

こうして和同會の伝統は維持され、やがて教員本富安四郎が和同會の目的を「剛健質朴の校風を發揮するに在り」とした和同會刷新の意志と氣風がしだいに醸成されて行つた。

本富安四郎は、幕末の慶応元年（一八六五）二月十五日、禄高一五〇石取りの旧長岡藩士本富寛居の三男として今朝白の屋敷で出生した。明治十三年（一八八〇）一月、十六歳で長岡學校に入学し、四年後の同十七年一月、二〇歳で長岡學校の教員となった。以来、明治四十五年（一九一二）四月五日、四八歳で逝去するまで、長岡學校、古志郡立長岡尋常中學校・新潟県立長岡中學校で、三たび、国語・漢文、歴史の教員として通算一八年間に亘つて教鞭を執つた。また、舎監として塾生（寄宿舎の入舎生）の訓育に当たつた。

昭和十年刊行の本富先生追悼集『山高水長録』の年譜には、「母校を愛するが故にまた敢て一身の榮達を求めず。一意長岡健兒の育英^{じんぎ}に盡瘁^{じんさい}せり。」と記されている。

明治十九年（一八八六）五月、二十二歳の本富は長岡學校の教員を辞して上京し、東京英語學校に学んだ。同二十二年三月、同校の夜学科を卒業すると、十月には鹿兒島宮之城村^{みやのしろ}の盈進^{えいしん}高等尋常小学校の教員として薩摩の地に赴任し、翌年十月には校長に昇任した。

明治二十七年（一八九四）五月、三〇歳になった本富は、古志郡立長岡尋常中學校に発展した母校に再度、教員として来任した。

本富は北越戊辰戦争で長岡を攻略した薩摩に敢えて赴いて何をしようとしたのか。

この頃本富が詠じた詩に次のような一節がある。

「勝ちに乗りたる西軍は 薩長土肥を始めとし…雲霞の如く群がりて我が境上に攻め寄せぬ」

後年、県立長岡中學校同窓会総代を務めた史家丸田亀太郎は、「鹿兒島健兒ノ剛健朴訥ノ風ヲ察シ以テ他日郷党子弟ノ指導ニ資スル所アラン」と本富の薩摩行きの意図を洞察している（昭和十年十一月二十二日、『本富先生記念碑』除幕式式辞による）。

かつて「薩摩青年ノ養成」の実情を自ら学び取って他日長岡の教育に自身で役立たせようとの思いを秘めて本富は敢然として薩摩に職を求めて旅立って行ったのである。

本富安四郎自身が再度の長岡来任後の明治二十九年一月、「南薩異事」と題してこのときの薩摩での見聞を『和同會雜誌』に紹介している。

本富が遙かな南薩の地で学び取りそれを長岡の地で伝え、教えようとしたものは何であったのか。

再度の来任後の明治二十九年（一八九六）、本富は、本来名誉会員であるべき教員でありながら和同會の会頭に推戴された。

当時、生徒として在学し、後に教員を務めた明治史家渡邊幾治郎はその間の事情を次のように記録している。

「眞に校風を樹立するには、學生の精神を涵養し、その施す制裁をして正義に基き、全學生を威服せしむるものでなければならぬ。それには全學生の中心となる者がなければならぬといふので、本富先生を推して

會頭とすることにしたのである。先生は未だ極く下級の教師でしたが、その人格と学識とを以て、聲名（こゑな）々々、長岡中學の中心人物と稱せられてゐたのである。

先生が一度會頭に推さるゝや、熱誠その任に當り、演説に文章に常に侃諤（かんかく）の議を唱へ、全校生を鼓舞激励された。ために、校風も頓に刷新された。先生は一時新聞記者となられた位で、伊藤銀月が地方にかゝる文章家があるかと歎稱した程の能文家であつたが、その後辨舌も仲々雄なるもので、悲愴感慨の調、その口熱し、その耳熱するや聴衆は酔ふがごとく、悲憤蹶起するといふ状であつた。その光景今に於て見るごとくである。

先生の演説型は、長く和同會に残つてゐたものである。長岡舊藩の土風、その教育鍛鍊の談、戊辰戦争の談、或はまた先生が親しく見聞せられた薩摩健兒の剛健・朴訥の談等は柔弱な當時の風潮と對照し、我々は先生の熱誠に魅せられて感激に堪へなかつた。（中略）先生の一言一行は能く全校生を動かした。（下略）（前掲『山高水長録』所載・渡邊幾治郎稿、「本富安四郎先生と和同會」に拠る）。

ここに記されているように、かつて井上圓了が創始した演説會としての和同會のあり方は年月を経てもなお本富安四郎等に受け継がれ、脈々として続いていたのである。

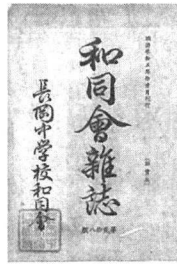
この年四月、二学級募集となつた古志郡立長岡尋常中學校に高野五十六が入学している。後の、太平洋戦争開戦時の聯合艦隊司令長官山本五十六である。高野五十六は、「言葉こそすくないが謹厳そのものの如き眼光の中に慈しみ深い温かさ」を秘めた本富安四郎から学級担任として教えを受け、その人格形成、思想醸成に大きな影響を与えられた。

明治三十年六月、本富よりも二歳下でかつて長岡學校で学んだ坂牧善辰が東京帝国大学を卒業して来任し、翌

三十一年十二月に教諭となった。明治三十年十月、本富は同校教員を辞して上京した。翌々三十二年三月、大阪府第三中學校（八尾中學校）教員として三十五歳で八尾市に赴いた。

同年四月一日、中學校令の改正にともなうて校名から「尋常」の語は除かれ、新潟県古志郡立長岡中學校と改称した。四郎丸「諏訪堂脇」（現校地）に移転、新築したこの学校においてはいつそう校風の刷新と発揚が図られた。

明治三十三年（一九〇〇）四月一日には郡立から県立となり、この年のみ校名を新潟県長岡中學校と称した。翌三十四年三月、高野五十六は五年制の同校を卒業している。同年四月一日以降は新潟県立長岡中學校と称した。



『和同會雜誌』第28号

正式に県立中學校として名実共に発足して間もない明治三十四年七月三日、安並正也校長が現職として急逝した。九月十七日、教諭であった坂牧善辰が校長に昇任した。坂牧校長はかつて一緒に勤務した本富安四郎の熱誠を忘れがたくしてか、本富を招請した。招請に応じ本富は翌明治三十五年（一九〇二）六月、三たび母校の教員として来任した。時に本富は三八歳であった。

明治三十五年十一月刊行の『和同會雜誌』第28号には「迎本富先生」として次のような歓迎の辞を掲載している。要点を抄出しておく。

「新緑滴るの候、我輩は、本富先生を八尾中學校より迎ふ。先生は嘗て我校に教鞭を執られ、懇々薰陶を垂れ、また、和同會頭として諄々計畫盡瘁せられ。會盛に校風揚る、是れ吾輩會員生徒たるものゝ感謝して止まざらんと



欲する所也。然るに、先生一度事を以て、我が校を辞せらるゝや。嗚呼、満校の弟子、誰れか離別の涙なき者あらざらんや。(中略) 今復た先生を、迎ふるの榮を得たり。吾輩の喜悅何ものか之れに若かん。^(こいねがわ) 庶幾くば、益奮勵拮据^(きつぎょ)し。以て先生の指導に、背かざらんことを。」

これを以て本富安四郎の三たびの着任への激烈な歡迎振りとその指導に期待を込めた思いとを交錯して感じ取ることができよう。

なお、この年の秋十月二十日には、アメリカ人の女性の英語教師ミス・フローレンス・M・ウィルソンが英語囑託教諭として来任している。その歡迎の辞には「之れ本校に學ぶものゝ幸福といふべし、好機逸すべからず諸子奮發勉勵せよ。」とある(『和同會雜誌』第29号所載)。

本富安四郎は三たびの着任後四か月目の十月、和同會規則の改正を行った。

その第二章 目的の項に、

「第三條 本會の目的は互に智徳を淬勵し軀軀を鍊り辨術を磨き併せて親交を厚ふし以て剛健質朴の校風を發揮するにあり」

と掲げた。そこには井上圓了が設立した初期の「和同會」が目的とした「相互の懇親を厚くし」と、「演説や討論の稽古をしようとするもの」という二つの基本的な目的を前提としながら、「剛健質朴の校風を發揮する」ことを明確に掲げた。この点において本富の和同會刷新の目的が明確に定まり以降の新潟県立長岡中學校と、現在の新潟県立長岡高等学校の、生徒会としての和同會の目的として引き継がれ、これによって和同會の精神的支柱

として「和して同ぜす」とする考え方が定着して現在に至ったのである。大正期ごろからはこれに「豪爽快活」の語を加えて校訓として定まっている。

なお、このときの規則の「第六章 會日」の項には、「第二十一條 本會は毎月二回、第一、第三土曜日放課後より開會し本會の議事を會議し若しくは演説討論等をなすものとす」と定められている。

ここには井上圓了の設立した「初期の和同會」での開會日と、「演説討論等をなす」という會の意図とが明瞭に取り入れられて規則として定められている。

明治三十六年（一九〇三）五月には本富が作詩した「長岡中學校の歌」を原作として、坂牧善辰校長のもとで植村クニ作曲によって「我が中學の其位置は」で始まる、現在の「第一校歌」のもととなる「長岡中學校校歌」が制定された。

七五調の長篇であるこの一番から五番まである校歌には学校の伝統ある歴史を称え、長岡の伝統精神を鼓舞するものとして本富安四郎の熱誠が込められており、感動的な校歌として今も歌い続けられている。

「本富先生」は明治の世がまさに終末を迎えようとしている明治四十五年（一九一二）四月五日、その四八歳の熱情的な生涯を閉じた。

四月十日に営まれた葬儀はあたかも長岡の「市民葬」の様相を呈したという。

むすび

新潟県立長岡高等学校の和同会は、「本富先生」が目指した「文武両道」を標榜して今に躍進している。

まさに学校の活動基盤として、和同会は井上圓了の先見による設立以来、その思想的規範が今日に至る迄一三六一年間にわたって学校のあゆみとともに脈々として受け継がれている。そして本富安四郎が傾けた和同會刷新への熱誠は、「殊に聞えし和同會 剛健忠武の熱血を」という第一校歌の歌詞の一節に凝縮されて歌い続けられている。

新潟県立長岡中學校と新潟県立長岡高等学校に学んだ人びとは、昨年迎えた学校創立一四〇周年記念を期して、「団結いと堅くして」、学校の伝統と和同會の「^{ほま}譽れ」を末代まで伝えてゆくことを心に秘めて日々努力しながら生きて行こうとしている。

◇参考文献・参考資料

- 『長岡高等学校百年史』1971 新潟県立長岡高等学校刊・土田隆夫編修、執筆
- 『柏の杜』土田隆夫1996
- 『寄宿舎日誌 私立長岡學校 長岡尋常中學校』新潟県立長岡高等学校同窓会刊
監修校注 土田隆夫2004
- 『和同會雜誌』所載各記事
- 『井上圓了の長岡時代』土田隆夫
- (東洋大学『井上円了センター年報 VOL18』2009)
- 『三田演説会と慶應義塾系演説会』

松崎欣一氏(慶應義塾大学出版会1998)

○『山高水長録』 1935

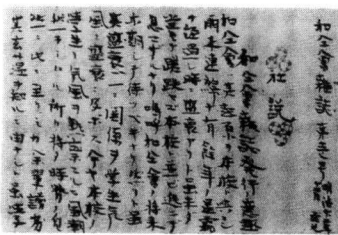
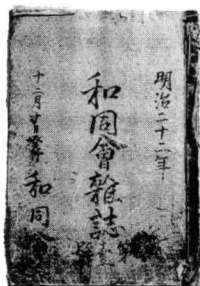
○『井上円了の初期思想(その二) 東京大学時代の軌跡』

三浦節夫教授(東洋大学『井上円了センター』年報 VOL 16 八二頁〜八四頁) 2007)

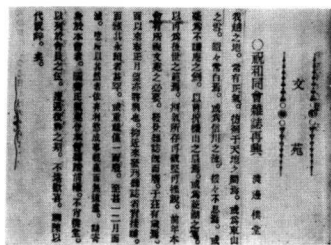
○その他、長岡の歴史に関する史・資料

〔附記・ 文中で歴史上の人物については敬称を省略させていただきました。〕

◇本稿は『和同会雑誌』第15号(平成二十四年三月十六日発行・新潟県立長岡高等学校和同会刊)所載の拙稿「和同会の設立と刷新」を一部追加・補訂して成稿した。



書写和同会雑誌の発行(明治22年12月)



印刷和同会雑誌の再興(明治28年1月23日)